総　　説

21世紀の農村医学が目指すもの

富山県農村医学研究会　豊　田　　務

現在我々が目指す農村医学の対象とする農業は，単に食糧生産のみならず，地域の環境を守り，共同生産を通じて協同の意識や，さらには命を育む心を育てるなど多面的な機能が注目され，農業の果たす役割が改めて注目され始めている。

かって日本農村医学会が設立された昭和27年当時の農村は物流に恵まれず，労働条件も劣悪で，罹病率・死亡率・衛生環境など全てが甚だしく都市より劣っていた。それら環境の諸条件によって農村医学のメインテーマは婦人の貧血，寄生虫症，腰痛などのいわゆる農夫症であった。

昭和30年第4回日本農村医学会で「農村における高血圧の疫学的調査研究」を私が発表した当時も未だ農夫症の研究が中心として取り上げられていた。

その後時代の推移と共に「農夫症」に見られる古典的な農村の健康障害は食生活や居住空間の都市化，そして農作業の機械化によって大きな変貌を遂げ，研究の対象は農薬中毒，農業災害，あるいは近年はダイオキシン等環境ホルモン，地球温暖化，遺伝子組み替え食品，加えて高齢者対策の問題が主題となり，研究対象も様変わりしてきた。

特に農山村地域における高齢者問題は，大きな課題である。介護保険制度が施行されつつある現在，これからの医療や社会のありようを考えてゆく上で大きな問題を提起している。

それは高齢者に多い疾患の発症率や生命転帰等を調査することで，高齢化の進む地域に対する保健・医療・福祉のための基礎資料を提供し，その実態を元に社会的インフラとしての医療構造や在宅介護のプラン，そして検診のあり方などを示唆すると思われる。

特に検診活動は，疾病を早期に発見する事で健康な状態と命を長らえる事，さらに検診を契機とした健康増進の動機付けを目的としている。農村における住民の検診は10年～20年のタイムスパンで観察し続けることが可能であり，更に対象が一定でドロップアウトが少なく，多数例でしかも長期観察ができ，地域に密着した「臨床試験」を育てる最適な環境である。

その意味では農村地域の医療は高齢者人口が増加する21世紀の我が国の医療を先取りするものとしての意義があり，高齢化が進む農村に於いては，研究・技術・専門・文化を取り込みながら，住民と協同の地域づくりもこれからの農村医療のあり方だろうと思う。

環境問題も21世紀の農村医学にとって大きな課題である。我々北陸に生まれ育った人間は，昭和40年頃までは毎年冬になると背丈を超える積雪を経験してきた。しかしそれ以降は生活に支障をきたすような積雪は稀で，身をもって地球環境の変化を感じるようになった。

この地球温暖化は二酸化炭素の増加による温室効果，成層圏オゾン層の破壊などが原因とされ，現在世界規模での対策が立てられつつある。

地球温暖化は水資源不足や感染症の増加など，さまざまな悪影響をもたらし，2100年以降には大洪水など，暮らしや生態系に取り返しのつかない破局をもたらす現象を起こす可能性があるなどとする，「気候変動に関する政府間パネル（ＩＰＣＣ）」の報告書案が出されている。

2080年には発展途上国を中心に，２億6,000万～３億2,000万人が新たにマラリアに感染する可能性があると試算され，資金などが限られる途上国は，温暖化被害が先進国に比べ，非常に大きくなると強調している。

また地球温暖化は河川流量の変化，洪水や干ばつの増加などにより，多くの地域で水質源の不足を招き，その年代には食糧不足に苦しむ人が数千万人も増える可能性があると予測している。

このような地球温暖化は，今後我々にどのような健康障害をもたらすのか，農村の基盤整備や保健政策の充実などを含め，農村医学のこれからのもう一つの大きな問題ではないかと考える。

食の安全性を確保することも重要な課題である。今日の日本の食糧事情は海外からの安い農産物が洪水的に輸入され，日本の農業経営を圧迫しているようだ。

最近スーパーなどへ行くと，一部の輸入食品には「遺伝子組み替え食品ではありません」と云う表示がしてある。食品を選ぶ際には食品としての安全性確認が不十分，環境や生態系に及ぼす影響，表示もされず，選ぶ権利，拒否する権利が奪われていることなどを考えると安易に求めることができなくなった。

従ってより安全で新鮮な国内農産物を望む声が高まってる。そのためには地域の農業，農村を守り，農民の健康を増進することが益々重要になってくる。農村医学もこれら食糧事情を念頭に置いて調査研究を続けていくことも今後の更なる課題かも知れない。

現在たまたま農村部の病院に勤務していると，農村の老人達が診察の合間に待合室で話に花を咲かせてお互いに心の交流を持ったり，中には90才を超えた老人が自転車で遠方より通院して来る。これら農村の高齢者は，都市部の老人には見られないような，心と身体の健康を維持しており，その根元は協同の精神による農業と大地から学ぶ自然にあるような気がする。

従って我々の志す農村医学は土から学び，土から離れてはならないと言った地域の医療が基本理念であり，この理念を守ることが農村住民の心と体の健康の醸成に貢献出来るものと考える。

富山県農村医学研究会では益々厳しくなる農業，農村に生活する人々の心豊かで健康的な生活を築くため，現在まで年次計画を立てて調査研究を続けてきた。

ちなみに平成13年度の調査研究計画は農業災害特に農業機械による災害，農薬中毒による生体内病変，農業機械・草刈り機・コンバインなどの騒音による聴覚障害，健康に対する農村の環境汚染問題，農村における高齢化対策の調査研究などで，今後とも会員の皆さんと共にこれら諸問題に鋭意取り組むべき多くの課題があるように思う。

帰する所，21世紀の「農村医学」は，農村の文化，産業，宗教を支えとして安全な「食」と美しい「自然環境」を保持する豊かで明るい「農村」を築き，そしてそこに人々が安んじて暮らし，集い，都市と農村の交流する環境と連携の仕組みを「保健・医療・福祉等包括的医療」の立場から支援することにあると考える。

そして，それらの成果と課題を中国を始めとするアジアの人々と交流することもこれからの国際化時代において必要なことであろう。